

楊張若名『ジツドの態度』をめぐって

吉井, 亮雄
九州大学文学部

<https://doi.org/10.15017/10000>

出版情報 : Stella. 17, pp.247-250, 1998-06-25. Société de Langue et Littérature Françaises de l' Université du Kyushu

バージョン :

権利関係 :



楊 張 若名『ジッドの態度』をめぐって

吉 井 亮 雄

1918年刊のクリスチアン『ジッドと現代人にかんするデータ』を嚆矢として、ジッドをあつかった単行書は、その存命中に発表されたものにかぎっても優に100点をこえる（現時点では約450点）。新聞・雑誌に掲載された記事や論文にいたっては、広く書評類までひろえば、やはり生前のものだけでも総数は4,000を下るまい。作家自身こういった批評言説には強い関心を示し、定期刊行物掲載分については専門業者に依頼するなど、早くから組織的な情報収集につとめている。「影響」の擁護者を自認する彼にしてみれば、他者の意見に敏感であることは日々自らを更新していくために必須の要件だったからである。

とはいえジッドを啓発してくれる批評はけっして多くなかった。事情はむしろ逆で、主人公のスキャンダラスな言動に作者自身の信条告白を見ようとするあまり、その賛否にかかわらず、彼がのぞんだような「美学的な観点」から冷静に人と作品を分析する批評は稀だったのである。こうした傾向はジッドが『コリドン』普及版で公然と同性愛を弁護した1920年代半ば以降はさらにもっと顕著になり、彼のまわりには宗教界をはじめとする諸陣営の強固な包囲網が形成されていく。

かくのごとく厳しい状況にあったジッドが公平にして正当なる評価を受けたと喜んだ数少ない評論のひとつに楊夫人の『ジッドの態度』¹⁾があげられよう。1931年1月12日付の『日記』はつぎのように記している――

「カイエ・デュ・モワ」にまた新たな〈ジッドにささげる弔辞〉が載っている。この一文はわたしに若干の才能を認めてはいる。だが涸れた、つまり害する力もなくなった才能だというのだ。そのすぐあと、ある中国人女性のかかなり長い論考『ジッドの態度』を読む。引用をたくさん使って（だが、選び方はうまい）書かれており、優れたものに思われる。わたしをただあるがままの姿に解そうとしているのもいい。²⁾

楊夫人はリヨンのカトリック系中華学校で学び、1930年にこの『ジッドの態度』を博士論文としてリヨン大学に提出し学位を取得した。地元では新聞にもとりあげられ、ちょっとした話題になったらしい。翌年には北京中仏大学に赴任し、ジッドからの礼状（後述）を巻頭に戴く第2版をかの地で出版している。以後、彼女がほかにジッドにかんする著述を残したか否かは不詳だが、少なくともそういった形跡はこれまでのいかなるジッド書誌にも見いだせない。

さて本稿が同書を取りあげたのは、なにも改めてその内容を概説するためではない。初期研究書のなかでも稀少本のひとつに入るとはいえ、あくまでも公刊された一書である以上、今となっては単なる内容紹介にこれといった意義は見いだせまい。そうではなく、たまたま筆者は楊夫人が書簡（本稿末尾に全文を掲載）を添えてジッドに贈った献呈本を所有しているのだが、そこには作家自身による書き込みがいくつか認められるからである。実証的資料としてはささやかなものだが、両者のあいだにはたとえ一時^{いつとき}ではあれ交流が存在したことを思えば、同書をめぐる具体的な証言としてこれらを記録しておくのもあながち意味のないことではあるまい。

『ジッドの態度』の論述は実質的には100頁ほどの分量で、8つの章からなる。人格形成、信仰やモラルの問題、美学的側面など、内容は多岐にわたるが³⁾、作家の関心をとくに強くひいたのが第5章「ジッドのナルシズム」（69-81頁）であるのはまちがいない。旧蔵本の略標題紙には「77 et sq.」と鉛筆で備忘が記され、これに呼応し78頁から80頁にかけて3カ所にやはり鉛筆で傍線がほどこされているからだ。それらの箇所を訳出しよう——

登場人物から身を離すことで、ジッドはその内面にさまざまな登場人物を増殖させていく。ここに小説家ジッドの秘訣が隠されているのだ。登場人物を創りだすたびに彼はまず初めはその人物に代わって生きようとする。そうすることで、たとえ他者のドラマであっても、自らの実体によって人物造型をおこなうのである。ジッドの小説は他者の生をあつかってはいるが、それでもやはり彼自身のイメージ——現実のイメージではなく、可能性の表われとしてだが——を映す。彼は他者の実在のなかで自らの潜在性を観察するのである。〔78頁〕

水面では波が立っていても湖底の水は静止しているように、ジッドはその奥底にかき乱されることのない静謐をたもっている。〔79頁〕

ジッドの内面には人間と芸術家とが共存している。彼の内にあるさまざまな性向がそれぞれ自由に増大し、やがては衝突しあうようになると、人間はそれらの対立に苦しむが、芸術家のほうはこれを喜びとするのである。闘いが熾烈なものになればなるほど、おのおのの性向は抵抗しあうことで美しさを増す。無秩序に陥るところか、はげしくぶつかりあうことで、対立する性向のあいだには力にみちた均衡が生じるのである。〔80頁〕

2番目の比喩的な文は3番目の一節で具体的に敷衍されていることさえ付言しておけば、それ以上のコメントは必要あるまい。研究レベルの飛躍的に向上した今日から見れば、いずれもが妥当な指摘であって、それだけに目新しいところはなにもないといえるだろう。だがラモン・フェルナンデスの著書やアルベール・チボーデの書評群など稀有な例をべつとすれば、ジッドにかんする批評の多くが党派性を色濃く帯び、しばしば冷静さにも欠けていた当時、無名の外国人研究者がこれだけ客観的な言説を発していたことは、受容史の面からもっと注目されてよいのではあるまいか。

最後にジッドが送った礼状にも簡単にふれておこう。先にも述べたように『ジッドの態度』第2版の巻頭を飾ることになるこの書簡（1931年1月12日付）で彼は、やはり第5章にはとりわけ感心した旨を述べ、上に訳出した第1箇所の第2文を引きながら「長いあいだ言ってほしいと望んでいましたが、わたしの知るかぎり、これまでだれひとりとして言明してくれなかったことで」と最大限の賛辞を送っている。また第6章の文体分析や、最終章の「2つの視点の対立は思考の不連続を意味するものではない」という文などにも意を強くしたとつづけ、一貫してふかい感謝の念を表わしている⁴⁾。これらがけっして社交辞令でなかったことはもはやことわるまでもあるまい。

註

- 1) Mme YANG Tchang Lomine, *L'Attitude d'André Gide. Essai d'analyse psychologique*, Lyon: Impr. Bosc frères et Riou, 1930, 128 pp.
- 2) André GIDE, *Journal II (1926-1950)*. Édition établie, présentée et annotée par Martine SAGAERT, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1997, p. 242.

- 3) 章題を列挙すれば——「ジッダ的個性の進展」, 「その信仰」, 「モラリストとしてのジッダ」, 「感覚世界にたいするジッダの態度」, 「ジッダのナルシシズム」, 「ジッダの象徴主義的美学の形成」, 「ジッダの古典主義」, 「同時代人から見たジッダ」。
- 4) André GIDE, «Lettre-préface» à Mme YANG Tchang Lomine, *L'Attitude d'André Gide*, Peiping: Université Franco-Chinoise de Peiping, 1931, pp. 5-6.

* * *

Lettre inédite de Mme Yang Tchang Lomine à André Gide

Le 10 décembre 1930

Monsieur,

Comment osé-je m'adresser à vous qui en tant qu'artiste le plus admiré me paraissez éloigné d'une si grande distance. Mais tout de même je décide à vous envoyer un exemplaire de ma thèse. Si mon étude vous décevra comme tout ce qu'on a pu écrire sur vous, vous pardonnerez une fois de plus ce péché de prétention. Personne ne pénétra vos secrets, pourtant vous ne les avez pas tous gardés. À certaines heures votre grande personnalité paraît si proche de nous, pourtant toujours insaisissable.

Peut-être je n'ai point compris votre œuvre mais j'espère que vous agréerez ma plus profonde vénération.

*Yang Tchang Lomine
Institut franco-chinois
St Irénée Lyon*

Autogr., coll. particulière, 1 f. 270×208 mm écrit au recto seulement (1 p.) à l'encre noire, sans enveloppe conservée. Lettre relative à *L'Attitude d'André Gide*, jointe à l'exemplaire dédié à Gide (sur le faux-titre, envoi autographe: «*Témoignage de ma profonde admiration. Yang Tchang Lomine. Le 13 décembre 1930. Lyon*»).